

一九八二年一月二十七日の講義 第二時限 (pp.175-196)

ミシェル・フーコー講義集成 < 11 > 「主体の解釈学」(1)

(コレージュ・ド・フランス講義1981-82)

ミシェル・フーコー著 廣瀬 浩司・原 和之訳 筑摩書房 (2004年)

担当：ばんこ

- 自己の実践が普及するにつれて、職業哲学者 (professional philosopher) の在り方が次第に曖昧になっていった
- 弁論家だけでなく、政治的にも批判的、不信の対象になっていく
- アウグストゥスの時代に出てきた問い
…哲学が自己の技法を自称し、人々に自分自身のことを配慮するように差し招く時、それは有益なのだろうか？
- ジャン＝マルク・アンドレの研究による仮説
 - アウグストゥスの周囲は変化していたが、アウグストゥス自身の変化もあった
 - 脱政治を好んだ時期／間暇と政治のバランスを考えた時期
 - つまり、職業哲学者をめぐる興味深い議論がたくさんあるということ
＝「個人自身の活動／政治活動」
- プリニウスの書簡集第一巻第一〇書簡
(プリニウスとエウフラテスが手紙のやりとりをしていた)
 - プリニウスによる、エウフラテスという重要な哲学者についての記述がある

<ここで注目したい要素>

- この時のプリニウスは、若くはあるが、子どもでも学齢期の児童でもなかった
- このテキストの中で、プリニウスはエウフラテスのもとに親しく出入りする
 - “*Penitus et domi inspexi*” = 私は彼を、「とことん・親しく」「家で」会い、見て吟味することができた
 - 少なくともプリニウスはエウフラテスのもとを継続的に訪れ、人生のいくつかの瞬間、生存のいくつかの局面を共にすることになった
- 二人の間には、強い感情的な関係があった
 - 「私は彼に愛されようと努めた」自分が彼を愛していたことには言及しない
 - ローマに典型的な考え方；さらに友愛 (friendship) を求めたい相手に自分を相させるための大変な作業、労力と行ったものがある
 - この作業にはいくつかの局面があり、さらに、友愛を求める相手が輪 (circle) の中で占める立場によって相対的に決まるルールを適用しながら行われる
＝一人の人を中心とした友愛の社会的構造

- エウフラテスについて非常に称揚する文章をプリニウスが残しているということ
 - =この人物を出発点として、人は哲学に対して考えうる最良の関係をとり結ぶことができる
 - この称揚は、伝統的に職業哲学者を特徴付けていた特徴を体系的に排除することでなされている
 - 丁寧に梳った（くしけずった）立派な卑下をして、清潔な服を着ている
（←→少々汚らしい様子だった）
 - とても話がうまい
（←→演説家との区別がな口になっている）
 - 気前よく鷹揚に人を迎え入れている
（←→人をかき乱すものだった）
 - 正義を行い都市の事柄を管理することが哲学であるとする
（←→政治的生活と一定の距離を保っていた）
 - これは単なるオマージュではない
 - これは、振る舞いの様式に、価値観の全体の中に、様々な技術全体の中に、（＝これらは伝統的な哲学ではなく、ローマ的な鷹揚さや修辞学の実践、政治的責任といったものが現れてくるような一つの文化的総体である）、哲学を送り込むことで生まれる価値である
 - 脱職業化した哲学者としてエウフラテスを讃えている
＝エウフラテスは社会かされた知恵を持つ持つ、一種の大貴族として提示されている

- この書簡から言えること
 - 哲学として自己の実践を求めていた制度・集団・個人の外側で、自己の実践が一つの社会的実践になったということ
 - それは、厳密には専門ではない人の間で発展した
↓つまり
- 1. 哲学的な制度の外、哲学という職業の外で、自己の実践を実践・普及・発展させ、その自己の実践を個々人の間の関係の一様式にしようという動きがあった
- 2. これは自己の実践を、他者による個人の統御の一種の原理とすること、個人が他者を視点や媒介として自分自身との間に一つの間を形成・発展・確立する一種の原理にすること、によって行われた
- 3. この他者は職業哲学者でなくても良いが、哲学を通過し哲学的な諸概念を持っている必要がある
 - ここで問題になっているのは、**師の姿・師の役割**
 - ソフィストの時代、ソクラテスなどの時代、師はその特異性に支えられていた
 - 自己の実践が社会的実践になることで、このような師の在り方は焼失した

- 自己の実践が社会的な実践と結び合う
＝自己の自己への関係の構成が、非常にはっきりした仕方で自己の＜他者＞への関係に接続した
- 事例；セネカの一連の対話の相手から見える、セネカ
 - 確かに、セネカは当時の「職業」という言葉においては職業哲学者だったと言える
 - しかし、エピクトレスやエウフラテスがそうであったような哲学教師とは比べられない
 - 彼は政治的活動、行政的活動をたくさん行いました。彼が関わった人、彼が忠告を与えた人、彼が良心の師（spiritual teacher）、良心の指導者（spiritual director）という役割を務めた人たちを見てみると、そうした人たちはすべて、**彼が他の関係も持っていた人であることがわかります。**
 - 例（１）母親、家族関係
 - 例（２）亡命中の一種の保護者
 - 例（３）遠い親戚
 - 例（４）一種の友人、たぶん顧客、元庇護者
 - 良心の指導という職業的な関係（the professional relationship of spiritual guidance）とは全く別の関係を持っていた
 - 彼は誰かを指導し、忠告を与えるために介入するわけですが、その都度彼がしているのは結局、社交的な関係、身分や地位の関係、政治的な関係を転調するということにすぎませんでした
 - そうした関係がまずあって、その上に彼は良心の指導という活動を接続し、接木していたのです
 - セネカやプルタルコスが他者を導くべく介入するのは、**これこれの人間との間に取り結ぶ社会的な関係**（友情、顧客関係、庇護、等）が、その次元としての――そして同時に、義務、責務としての――魂の助力（soul service）において。また、他者が正しく自分の道を辿るための、忠告の基礎になりそうなことにおいて。
- 最後のテキスト；フロントとマルクス・アウレリウスの往復書簡
 - フロントは、マルクス・アウレリウスの先生。また、哲学ではなく、弁論術の先生だった
 - アウレリウスの言及「フロントのおかげで、私は権力の行使がいかに偽善をもたらすか、また我々のところの貴族が、どれだけ「愛することができない」かを悟ることができた」
 - 偽善
 - ……偽善や追従の対極にある、フロントという人の素直なあり方を示している
 - ＝パレーシアの考え方

■ 愛情

……愛情を土台に、フロントとアウレリウスは関係を進展させていた

● 引用；マルクス・アウレリウスからフロント宛の書簡第六

→指導される側の体験が示されている

- ここで書かれているものは、良心の指導に関する職業的で専門的な関係ではない
- この関係に支えになっているのは、友愛（friendship）・愛情（affection）・情愛（tenderness）
※性的な性質のものではないことに留意
- 哲学的・技術的關係ならぬ師との愛情の關係で、この手紙を分析してみる
→3類型にできる

1. 健康や養生法の詳細

- まずちょっとした悪寒と、それから薬の服用が書かれていた
- 同様の内容は、セネカの手紙でも見られる「昨夜はよく眠れなかった、悪寒がしたのだ」
- 薬の例…蜂蜜入りの水、うがいをする
- 睡眠の例…「横向きに寝る」＝当時の医術の倫理において、清き眠りを指す
- 食べ物の例…少しのパンしか食べない
- 眠り・目覚め・食物・入浴・運動・投薬の言及
＝自分の医術的養生を説明している

2. 自分の家族や宗教に関わる義務

- 父親の元へ行き父が犠牲を捧げるのに立ち会い、母親と話す、などの記述
- また、農作業に関する記述
- マルクス・アウレリウスが描き出すのは、農民の生活
[農民の生活と関連するモデル]
 - カトー『農業論』が言及されている
 - ローマにおける農場所有者が、最大の繁栄・最良の倫理的形成・都市の利益のためにはどう行動すべきか
 - カトー『農業論』は、クセノフォン『家政論』を背景に描かれている
 - 紀元前5世紀～6世紀のアッティカ地方の田舎貴族の生活がいかにあるべきか
- 帝国の世継ぎのアウレリウスは、田舎貴族の生活を送る必要はなく、これは通常の生活ではないと言える
- 農業生活＝一種の研修として必要だった
 - 田園生活の中では、ひとは基本的で根本的な必要に最も近いところにいる
 - 私たちにとってモデルになるべき、過ぎ去りし時代の旧来の生活に最も近いところにいる
 - 一種の教養溢れる間暇を实践できる＝身体的な運動

- 多いに汗をかき、大声を上げられる…葡萄収穫は、養生法の一部をなしていた
- 読み書きをする時間も、十分残されていた
- 田園研修は、クセノフォンとカトーの古いモデルの再活性化とも言える
 - =社会的、倫理的、政治的なモデルが、今や訓練という資格で再び取り上げられている
- これは、他人と一緒に行う一種の退却だが、その目的は自己自身であり、自己をよりよく形成し、自己に対し行う作業を進めて自己へと到達するということ
 - =クセノフォンの用法での家族関係・家政的生活

3. 愛に関わる要素

※「真実の愛」という話、どういう性別なのか、性的な成就がある愛か、ではない

- 2人の男性（フロントとアウレリウス）と、2人の女性（アウレリウスの母と、フロントの娘グラティア）の愛が比較される描写
 - 愛の強さ、価値、形式を比べあう
-
- 身体／身近な人々と家／愛
 - 養生法／家政学／恋愛術
 - これらは、絶えず互いに参照しあっている
 - …養生と食餌に配慮するからこそ、ひとは農業生活を実践し、収穫に出かける（家政）。そして家族関係の中で、ひとは愛の問題に出会う。
 - これらは、アルキビアデスの一節でも登場している
 - …ソクラテスは配慮すべきは魂だと規定した
 - 自己への配慮は身体でも財産でも愛でもないと言われていた
 - 反対に、この三つが自己への配慮に再統合されているが、これは反射面としてである
 - いわば自我が自己を試練にかけ、自己を訓練し、そしてその生存の規則であり目的であるような自己の実践を展開する機会として再統合された
 - 養生法・家政学・恋愛術は、自己の実践の応用領域に
 - 「うちに戻って、横向きになって寝る前に、私は自分の務めを思い返して、一緒におられないのが残念な私の優しい先生に説明申し上げました、云々。」
 - これは一体何か？…良心の吟味（examination of conscience）
 - セネカのテキストにも類似性がある
 - 「毎晩灯りを消し、妻が口を噤むと、私は瞑想に入り1日を確認します」
 - 自分の生活と過去の時期の巻物を、目の前に広げてみる必要性

- 寝る前に、過ぎ去った1日を顧みること、すべきだったこと、行ったこと、その然るべきやり方と実際に行ったことを比較すること。
- さらに、それを「私のたいへんお優しい先生 (my dearest of master)」に説明する (justify; ある行動や意見が合理的であることを示すための理由を提供する) こと。
- これは、指導 (guidance) がどのようにして自然な経験になっていったのかの事例
- 親しい友人、たいへん強い愛情的関係 (someone dear to one/intense affective relations) のある友人に対し、良心の吟味を行う
- 哲学者としての資格の有無を問わず、単に友人であるからという理由で、友人を良心の指導者 (spiritual director) とすることがごく普通に行われていた
- そして、ひとは自分自身に対しても、過ごした1日、行った仕事、嗜んだ気晴らしについて、こうした態度をとる
- 別の誰かに、こうしたことを説明しなければならない
→誰に?…裁判官・捜査官・師など

[まとめ]

- 自己の実践の展開を通して、自己の実践が（哲学の師とその生徒という関係のない時ですら可能な）一種の社会的関係となった
＝＜他者＞との言語的な関係の新しい倫理
(a new ethic of the relationship with the Other)
- この他者との言語的な関係の倫理＝パレーシア
- パレーシアとは「率直さ (frankness)」と訳されるが、これは良心の指導 (spiritual direction) の実践において、他者と共有されるべきゲームの規則であり、言語的行動の原理のこと
- 次回は、この良心の指導における他者への言語的な関係（パレーシア）がどのように、どのような形で技術化していったのかを見ていく

[コメント]

- 哲学者の脱職業化によって、パレーシア的な関係を持つ人を師にすることができるようになったことにより、他者を介した自己の実践が社会的関係になった。人間は特別な師ではなく、自らの家族的関係の中にいる友人を師にして、自己への配慮を求めることができるようになった。
- 「自己の自己への関係の構成が、非常にはっきりした仕方で自己の＜他者＞への関係に接続した」について。これまでも他者の存在と、自己の実践における反射の話が取り上げられてきていたが、特に「はっきりした」点の変化がうまく読めていない気がする。これまでは、自分の魂への反射に重きが置かれていたが、今の議論は3要素が再活性化されて反射面として位置付けられたという点に重点を置いている、という違いであっているのか。

- 農業が自己の実践の訓練として位置付けられる理由として、「生存に近い」活動であり「古代の」活動と接続できることが言及されていた。農業であることのこれらの理由から考えるに、自己の実践の生活的側面における訓練は今や結構廃れていそうだと想像した。
- 愛情について。英語のdearという言葉がしっくりくるのではないか。今の恋愛関係にも含まれているし、もっとシンプルに捉えられるとしたら、兄弟姉妹・家族や親・幼馴染の親友などとの関係性にも見出せるかもしれない。
- パレーシアが、単に社会的な関係であるだけでなく、「言語的」である（言語 language;人間がコミュニケーションを行うための方法として使われる音声や記号の体系、言説一般 discourse;話し言葉や書き言葉の延長としての討論・対話、でもなく、verbal;、口で表現される内容や、言葉として伝えられる情報に関するもの、ということは、口語・コミュニケーションと近いのか？）という点が気になった。分解していうと、率直に話すこと、さらにそれを相手とも共有していること、と言えるのだろうか。多分次の授業でパレーシアに関する解説はもうなかったと思うので、残念だ。